学校事例２

道徳ノートを活用し、子どもも保護者も主体的にかかわる評価を実現

大阪府　寝屋川市立石津小学校

大阪府寝屋川市立石津小学校では、10年以上にわたる研究の成果を生かして、道徳科の評価方法を確立させた。「評価の観点」を示し、学校全体で評価規準を統一。授業公開などで、保護者とも評価のあり方を共有している。また、算数科では、学期末に知識・技能の活用力を問うテストを実施し、思考・判断・表現等の評価方法を試行中だ。

◎1982年に開校。学校教育目標は「豊かな人間性と強い連帯感を持ち、自主的に考え、何事もやり通せる児童」。同一中学校区の１中２小で小中一貫教育を推進し、地域で指導力向上を図っている。

校長　森本朋美先生
児童数　298人
学級数　17学級（うち特別支援学級５）
電話　072-838-9312
URL　http://www2.city.neyagawa.osaka.jp/school/e/ishizu/

校長
森本朋美
もりもと・ともみ

同校に教頭として赴任後、校長に着任し7年目。

校内研究推進部部長
竹内寿康
たけうち・としやす

同校に赴任して4年目。5年生担任。

教務主任
釜我あゆみ
かまが・あゆみ

同校に赴任して５年目。道徳教育推進教師。音楽専科。

道徳科での学習評価

「道徳ノート」や板書の画像から子どもの内面を見取る

育成を目指す子ども像に「誰とでも、どんな場面においても協働できる子ども」を掲げる大阪府寝屋川市立石津小学校では、その子ども像の具現化を目指して、道徳科と算数科で実践研究を進めている。森本朋美校長は、次のように語る。

「本校には30代前半までの若手教員が多く、指導力向上が課題です。道徳科と算数科で合わせて年13回行う公開授業は、主に若手教員が担当します。同一中学校区の小・中学校と合同で行う場合もあり、校内に加えて、他校の教員からも指導方法や子どもを見る視点についてアドバイスを得られる場となっているため、先生方は熱心に研鑽（けんさん）を積んでいます」

では、同校の道徳科と算数科の学習評価について、それぞれ見ていこう。

同校では、2009年度から道徳教育の実践研究を進めてきた。特に、2016年度からは、道徳の教科化を見据えて重点テーマを「評価」とし、評価の目的を「児童を励ます評価」「授業改善の資料としての評価」と位置づけた。評価の際に子どもを見取る方法として用いているのが、学校独自の「道徳ノート」と、授業ごとの板書の画像だ。

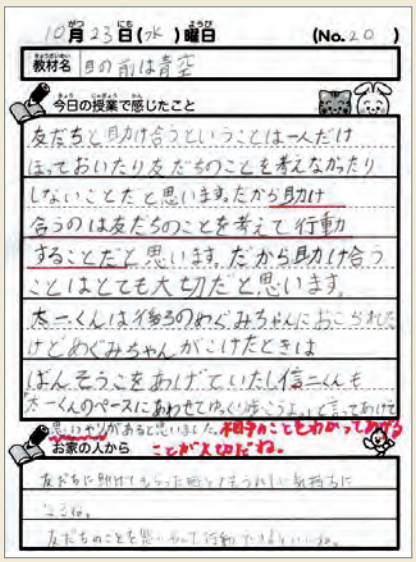
研究初期に導入した「道徳ノート」は、子どもが書いた授業の振り返りから学習状況や道徳性にかかわる成長の様子を見取り、認め、励ます評価に活用してきた。道徳教育推進教師を務める釜我（かまが）あゆみ先生は、次のように説明する。

「『道徳ノート』では、授業の目標にかかわる記述に着目し、該当箇所に下線を引くなどして、子どもが考えをさらに深められるようなコメントを書いています（**図１**）。目標とずれた記述があれば、問い返すコメントを書き、子どもが立ち戻って考えられるようにしています」

ただ、書くことが苦手で、「道徳ノート」に自分の考えを表現できない子どもの内面は、どう見取ればよいかといった課題があった。当初は、そうした子どもを中心に、授業中の気になる発言や様子を教員がその都度書きとめていたが、教員の負荷が大きいこともあって長続きしなかった。そこで、次に行ったのが、授業の板書の撮影だ。黒板には、授業中の子どもの発言を教員自身が整理し

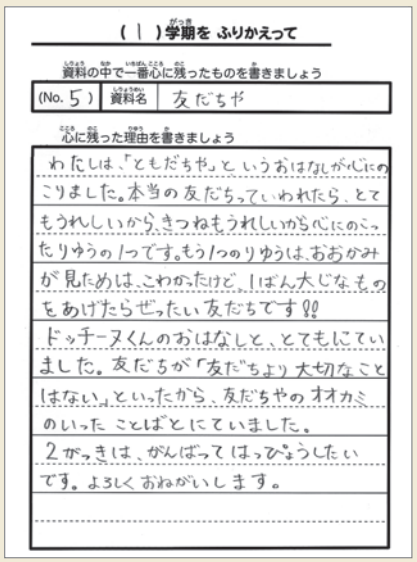
図1 「道徳ノート」の子どもの記述と、教員の評価（例）

◎授業の振り返り


10月23日(水)曜日 (No.20)
教材名 目の前は青空
今日の授業で感じたこと
友だちと助け合うということは一人だけほっておいたり友だちのことを考えなかったりしないことだと思います。だから助け合うのは友だちのことを考えて行動することだと思います。だから助け合うことはとても大切だと思います。
太一くんはタ多ろのめぐみちゃんにおこられたけどめぐみちゃんがこけたときはばんそうこをあげていたし信二くんも太一くんのペースにあわせてゆくり歩こうよ。と言ってあげて思いやりがあると思いました。相手のことをわかってあげることが大切だね。
お家の人から
友だちに助けてもらった時とてもうれしい気持ちになるね。
友だちのことを思って行動できるといいね。

子どもの記述（赤字の下線）から、本時のねらいとする価値に迫ることができたと担任は評価し、励ますコメントを記している。

◎学期ごとの振り返り


(1)学期を ふりかえって
資料の中で一番心に残ったものを書きましょう
(No. 5) 資料名 友だちや
心に残った理由を書きましょう
わたしは、「ともだちや」というおはなしが心にのこりました。本当の友だちっていわれたら、とてもうれしいから、きつねもうれしいから心にのこったりゆうの1つです。もう1つのりゆうは、おおかみが見ためは、こわかったけど、1ばん大じなものをあげたらぜったい友だちです!!
ドッチーヌくんのおはなしと、とてもにていました。友だちが「友だちより大切なことはない」といったから、友だちやのオオカミのいったことばとにていました。
2がっきは、がんばってはっぴょうしたいです。よろしくおねがいします。

この振り返りでは、以前読んだ資料で学んだことと比較し、自分にとって価値あるものを自覚し、それを深めようとしている姿が表れていることを評価した。

「道徳ノート」は、進級時に次の担任に引き継ぎ、子どもの理解を深める資料としても活用している。
（イラスト：©コンドウ カナエ）

＊3点とも、石津小学校提供資料をそのまま掲載。

て書く。その板書の画像を見返せば、授業中の子どもの姿が思い起こされ、評価に活用できると考えたのだ。

板書の画像データは、校内の共有フォルダで管理。月1回、各教員に自身でよいと思った板書の画像を提出してもらい、それらの中で共有すべき板書をプリントアウトして廊下や目に止まりやすい場所に掲示している。各教員は、他の教員の板書を見ることで、板書の仕方の参考にしたり、授業づくりや授業改善に生かしたりすることができるという。

通知表は2部構成で記述し、子どもの成長を伝え、励ます

通知表や指導要録での評価の書き方も、学校全体で統一した。新学習指導要領やその解説の該当箇所を読み解き、先進校の取り組みや研究者の見解を勉強し、全教員で意見を出し合った。そうして作成したのが、「評価の観点の一覧」（**P.16図2**）だ。

通知表の記述は、前半と後半に分け、前半は学習活動の様子を踏まえた子どもを励ます内容、後半は具体的な学習状況の記述とし、全体で100～150字程度で簡潔に表現することにした。森本校長は、前半の評価について次のように説明する。

「担任は、子どものキラリと光る部分に焦点をあてて評価をしますが、それは限定的な評価であり、学習指導要領の解説*で示された『大くくりなまとまりを踏まえた評価』にはあたらないと考えました。そこで、大くくりの評価の仕方について議論をした結果、学期や学年など一定期間のまとまりの中で捉えた子どもの姿、例えば、『めあてについて深く考えていた』『自分の思いをしっかり書いていた』などとすることにしました」

ただ、大くくりの評価だけでは抽象的な文章となり、子どもも保護者も何を評価されているのかが分かりにくい。そこで、通知表の記載を前半と後半の2部構成とし、後半に具体性を持たせた。

一方、指導要録には、前半の評価のみを記載することにした。指導要録は公共性が高く、子どもの具体的な記述はなじまないと判断したからだ。

教員の主観が評価に影響する可能性についても、時間をかけて議論した。その結果、目に見えないものは評価しないこととし、「意欲が高まった」「深く思っていた」といった記述はしない方針とした。

「『教員の実感で褒める』といった評価の考え方もありますが、通知表のように文章で残す場合には、根拠を示せない記載はしないことにしました。結果的に、似通った文章になるかもしれませんが、正当性を高めることを重視しています。評価の自由度が狭まるため、通知表は学年末のみの記載とし、その分、『道徳ノート』で、子どもを褒めて励ます評価を重視しています」（釜我先生）

大くくりなまとまりで評価するための資料として、「道徳ノート」には学期末に学期間の授業を振り返っていちばん心に残った教材とその理由

＊ 文部科学省「小学校学習指導要領解説　特別の教科　道徳編」（110ページ）。

について書くページを設けた（**図１**）。そして、学期末に振り返る際には、教員が撮りためた板書の画像を電子黒板に映し、「この教材では、こんな話をしたよね」と言って子どもに授業を思い起こさせてから、「自分の心に残っているのは何かな？」などと問いかけている。子どもも、自分の「道徳ノート」を読み返すことで、学期全体で学んだことや自分の心の変化などを振り返ることができている。

担任の願いや授業の目標を保護者向けの指導案で共有

「道徳ノート」には、保護者のコメント欄も設け、子どもが保護者からの評価も受けられるようにした。保護者のコメントは必須とはしていないが、教員のコメントを読み、子どもに問い返して一緒に考えを深めていく保護者も多いという。

さらに、保護者と評価を共有するための重要な場が、毎年行う道徳科の公開授業だ。当日は、担任の願いや授業の目標などが書かれた保護者向けの指導案を用意し、配布。保護者は指導のねらいを理解した上で、わが子の学習状況を見取る。そうすることで、担任の子どもへの評価も納得できるようになるという。

「保護者や地域には、道徳科の目標を学校便りや地域の会合などで折に触れて説明するようにしています。家庭と地域と学校が同じ方向性を共有してこそ、道徳教育の目標は達成できると考えています」（森本校長）

2017年度からは、同校の「道徳ノート」を寝屋川市のすべての公立小・中学校が活用。さらに、同校の中学校区では、小・中学校が合同で道徳教育の公開授業を行い、地域の足並みがそろった道徳教育を展開している。

図２　道徳科　評価の観点の一覧

評価の視点	評価のポイント	前半…大くくりの評価		
一面的な見方から多面的・多角的な見方へと発展させているか	道徳的価値に関わる問題に対する判断の根拠やそのときの心情を様々な視点から捉え考えようとしている。	（道徳の）学習を通して、道徳の学習において、 道徳で学習した内容を、それぞれの学習を、 人生についてよく考え、 友だちと考えを交流する中で、考えを発表し、交流する中で、	様々な価値について、何が大切であったか、一つ一つの価値について、大切なことを、自分が大切にしたいと感じたことについて、（道徳的価値）について、自分の言葉で学習のキーワードを見つけ、道徳的な問題点や良さに気付き、	自分なりの言葉で表すことができました。 （道徳ノートに）書いていました。自分の考えを書いていました。
	自分と違う立場や感じ方、考え方を理解しようとしている。		自分の価値観を広げ、新しい見方を取り入れ、新しいたくさんの気づきを、	発言していました。発表していました。自分の考えを発言していました。自分の思いを発表していました。
	複数の道徳的価値の対立が生じる場面において取り得る行動を多面的・多角的に考えようとしている。		自分の経験と重ね合わせながら、自分ならどうするかと考えながら、	
道徳的価値の理解を自分自身との関わりの中で深めているか	読み物教材の登場人物を自分に置き換えて考え、自分なりに具体的にイメージして理解しようとしている。		登場人物の気持ちによりそって、優しい気持ちで登場人物によりそいながら、	話し合っていました。 うなずきながら聞いていました。
	現在の自分自身を振り返り、自らの行動や考えを見直していることがうかがえる部分に着目している。		これからの自分がどうありたいか、自分自身のこととして振り返り、今後の自分に活かしていこうと、これからの行動に活かそうと、自分の生活に活かそうと、よりよい自分になろうと前向きに、	学習に取り組むことができました。学習することができました。
	道徳的な問題に対して自己の取り得る行動と他者と議論する中で、道徳的価値の理解を更に深めている。		自分(の気持ち・経験・生き方)と関連付けて、自己の生き方に関連付けて、自分に置きかえて、自分ならどうするかと考えながら、より広い視野で物事を捉え、	
	道徳的価値の実現することの難しさを自分のこととして捉え、考えようとしている。		自分自身に照らし合わせて、自分のこととして捉えながら、	

後半…具体的な学習状況		
<記述や授業中の発言から顕著な部分を抜き出せる場合> その児童の、特に印象に残った言葉や感想を抜き出したり、まとめたりして記述する。	「(主題名、内容項目)」について考える学習では、「(教材名)」(の学習)では、	～と、(価値)の大切さに気付き、道徳ノートに書いていました。 ～と、(価値)の良さや大切さについて発言していました。 ～という経験を振り返り、そのすばらしさについて書いていました。
		～という思いを道徳ノートに書き表していました。 ～というすてきな思いを発表することができました。 ～と自分が大切にしたいものを見つけ、道徳ノートに書いていました。 ～と今の自分にできることを見つけて、道徳ノートに書き表していました。
		～と、前向きに生きていこうとする意欲が書かれていました。 ～と登場人物に力強く共感したことを発表していました。
		～という〇〇さんの考えに、たくさんの児童がうなずいていました。 ～という○○さんの考えを発表し、意見を交流していました。
<記述や授業中の発言から顕著な部分を　抜き出すのが難しい場合>		[授業中の様子から] 友だちの意見に関心を持って聞くことができました。 （道徳的価値）の大切さについて、深く考えることができました。 [ペア・グループ活動での様子から] （道徳的価値）について、友だちの話を聞いて改めて考えることができました。 友だちの考えをよく聞いて、（道徳的価値）の良さに気付くことができました。 [役割演技や動作化での様子から] 登場人物の行動を追体験することで、（道徳的価値）のすばらしさに気付くことができました。 登場人物になりきって演技することで、登場人物の心情について考えることができました。

＊石津小学校提供資料をそのまま掲載。

算数科での学習評価

学期末に行うテストで活用力を測る

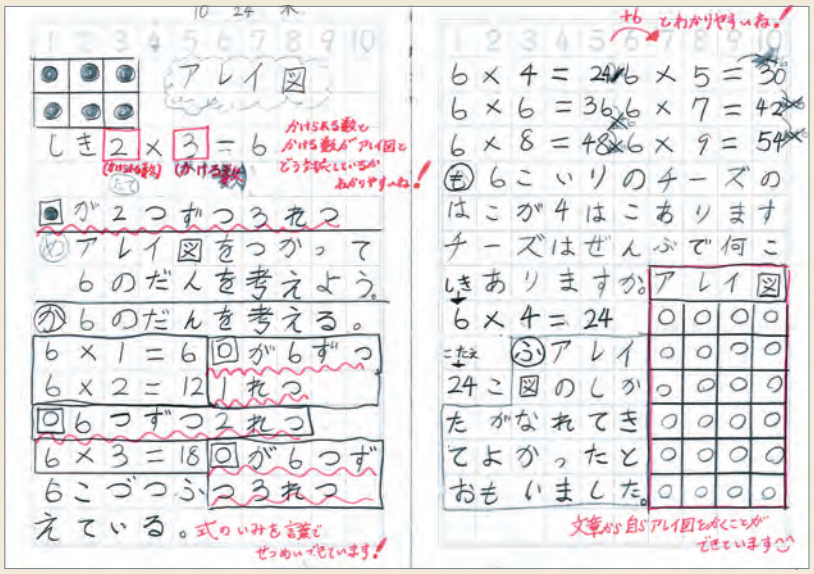
算数科では、2011年度から実践研究を行っている。2012年度からは研究主題を「つながり高まる算数」とし、発表・交流活動を中心とした問題解決型学習を行った。そして、2017年度からは、新学習指導要領で示された「数学的な見方・考え方」に結びつく言葉、図、数、式、表、グラフを相互に関連づけた活動を軸に、実践研究を進めている。

年３回実施する研究授業は、学年縦割りのグループで行う。例えば、２年生の研究授業には、２年生担任のほかに、高学年・中学年から各１人が加わり、指導案を検討する。校内研究推進部部長の竹内寿康先生は、その理由を次のように説明する。

「例えば、５年生で学習する小数÷小数の計算でつまずく子どもは、４年生の小数÷整数でわり算の概念を理解できていないなど、学習内容は学年を超えて関連しています。６年間を系統的に捉えた授業づくりができるよう、研究授業は異学年混合としました」

新学習指導要領で評価の観点が３つに整理されたことを受け、算数科では2017年度から思考・判断・表

図3 子どもの算数のノートと教員の見取り（例）



思考などを見取るために、子どものノートを定期的にチェック。上記のノートは、図と式と言葉が関連づけられている点や、式に「→＋6」と書き加えられている点に着目し、言葉と図が関連していて説明の根拠となり得ていると評価し、コメントを記入した。また、右の写真のように、子どもにお手本にしてほしいノートを廊下に掲示し、子ども同士でも学び合えるようにしている。

＊石津小学校提供資料をそのまま掲載。

現を評価するための学校独自の「説明力テスト」（現在は、「活用力評価テスト」）を、学期末に行うこととした。問題数は１～２問程度とし、１回15分程度で解答できる量だ。学年ごとに子どもがよくつまずく単元や活用力を試してほしい単元を選定して、文部科学省「全国学力・学習状況調査」や寝屋川市の学習到達度調査などの問題を基に作成している。

「『全国学力・学習状況調査』等は、子どもに身につけてほしい資質・能力の指針となるものであり、良問がそろっています。『活用力評価テスト』はその要素を取り入れた問題とすることで、教員の作問の負荷を減らすことも目指しました」（竹内先生）

教員自身が問題を作り、学期末までに子どもに身につけさせたい資質・能力を明確に意識することによって、単元の目標から逆算して授業づくりをする考え方も浸透してきたと、竹内先生は指摘する。

「単元の到達度を測る問題を教員が自ら考えることで、普段の授業でも思考力や表現力などの育成を強く意識した指導ができています。子どもが思考・表現する場が増え、子どもの授業ノート（**図３**）を見ると、考える習慣が身についてきているのを感じます」

さらに、森本校長は、「活用力評価テスト」の意義を次のように語る。

「日々の指導では、授業を進めることに集中しがちです。そうした中、何のためにその教育活動を行うのかを見失わないように、目標を再確認することが重要です。学期末に行う『活用力評価テスト』は、そうした場にもなっています」

「活用力評価テスト」の実施後は、子どもの解答の傾向や正答率などを学年団や校内研究推進部で分析し、指導改善や研究授業に生かしている。

2020 年度に向けて

評価検討委員会で新年度までに指針を提示

今後の課題は、2020年度の学習評価の方針を示すことだ。現在進めている教育課程の編成や学校行事の年間計画の立案を終えた後、各学年の代表１人と、校内研修部、管理職から成る「評価検討委員会」で、年度内に評価方針を打ち出す予定だ。

「本校のこれまでの研究成果や本年度の成果と課題を、国立教育政策研究所から出される指針や教科書とすり合わせて、本校の学習評価の方針を検討し、さらに校内で共有して、４月の新課程全面実施を迎えたいと考えています」（森本校長）

「主体的に学習に取り組む態度」の評価については、道徳科の評価と同様に、教員の主観に左右されずに評価するにはどうすればよいか、評価の材料をどのように集めるのかが課題になると、森本校長は語る。

「振り返りの質の向上が、『主体的に学習に取り組む態度』の評価の鍵になると考えています。感想にとどまらない振り返りを子どもが書けるようにし、次の学びにつなげていくためには、どのように指導すればよいのか。道徳科の実践研究を参考にして、子どもの書いた振り返りを教員間で共有し、まずは子どもの内面を見取る力を高めていきたいと思います。そうした指導改善によって学習評価も日々進化を遂げるものであり、指導や評価に完成形はありません。これからも目の前の子どもの成長に資するよう、不断の努力をしていきたいと思います」